

韓国におけるチベット仏教研究史（車）

韓国におけるチベット仏教研究史

車 相 燐

1 はじめに

韓国では、最近、チベット仏教に対する関心が徐々に増加している。例えば、『ミラレパ（Mi la ras pa）の十万頌』やダライラマ（Dalai Lama）14世の講演など、チベット仏教の高僧達の教えに興味を持つ人々がいる。ところが、チベット仏教に興味を示す人々の大多数は、論理的かつ思惟的な体系を持つ顕教に対して教学的な関心を向けているわけではなく、むしろ神秘的な魅力を持つ密教の方により多くの関心を抱いているようである。このようなチベット仏教の人気を反映してか、書店にはチベット仏教関連の瞑想本が数多く並べられている。大学が主催するチベット語やチベット仏教関連の講座にも、少なからぬ人達が参加している状況である。

ところが、チベット仏教に対する大衆的な関心が徐々に高まってきているにも関わらず、チベット仏教に対する韓国国内の学問的研究は非常にゆっくりとしか進められていない。第一義的には、それはチベット仏教を研究する学者の層がまだ厚くないからである。

本稿においては、韓国においてなされてきた、近代から現代に至るチベット仏教研究の流れを簡略に紹介することを第一の目的としたい。このことを通して、韓国におけるチベット仏教研究の現状と今後の課題とを、ある程度まで導き出すことができるであろう。¹⁾

2 近代におけるチベット仏教に対する認識

まず、近代におけるチベット仏教関連の言論を紹介してみたい。

HS生²⁾は、日本に留学した朝鮮人学生の学生団体でありながら、学会の性格をも帯びていた「大韓興学会」の機関誌、『大韓興学报』³⁾に寄稿し、主にチベットの地理と気候に関する内容を記述している⁴⁾。同年の5月に同誌に掲載された続編においては、彼はチベットの歴史を七つの段階に分けて記述している⁵⁾。

李 能和（イ・ヌンホァ、1869-1943）は、著書『朝鮮仏教通史』において蒙古仏教とチベット仏教について言及している⁶⁾。さらに彼は仏教関係の雑誌に、「尚玄居士」というペンネームで、チベットの旧派（=rNying ma）と新派（=dGe lugs）について紹介している。短い文章ではあるが、彼はサキャ（Sa skya）学派の第五代祖師であるパクパ（'Phags pa, 発思八）と元の世祖フビライ・ハンとの関係や、パクパの蒙古文字考案、さらに朝鮮に設置されていた蒙文訳院や、ハングルと蒙古語の類似性について触れている⁷⁾。彼はチベット仏教に対する自分の関心は、チベットに二回入国した河口慧海（1866-1945）に起因するものであると述べている⁸⁾。

李 能和以後、チベット仏教に関する言論はほぼ皆無である。近代におけるチベット仏教関連の記述は非常に断片的であり、ごく一時的にチベット仏教に対する関心があっただけで、その関心を持続的に保つことはできなかったようである。

3 現代におけるチベット仏教研究

韓国では、1980年代からチベット語とチベット密教に関する紹介がなされるようになった。

日本の大谷大学に留学した鄭 泰燮（チョン・テヒョク）は、帰国後、

チベット密教の起源と歴史の紹介を始めた。⁹⁾ また彼は日本留学の経験をもとに、韓国国内で初めてチベット語の文法書を公刊した。鄭 泰燦のこのような努力が基盤となつて、チベット密教とチベット語に対する関心が徐々に増加していった。¹⁰⁾ 彼は漢訳仏典を中心とする韓国仏教学界の既存の研究成果を反省し、梵語仏典¹¹⁾とチベット語仏典¹²⁾の重要性を認識して、それに対する研究成果を公表していった。

高野山大学に留学した許 一範（ホ・イルボム）は、帰国後、鄭 泰燦に続いて二番目にハングルで書かれたチベット語の文法書を公刊した。¹³⁾ 彼はさらに、ダライラマ14世が東国大学校に寄贈したラサ（lHa sa）版大蔵経に対する書誌学的な解説と目録内容の紹介、チベット訳の円測『解深密経疏』に対する概説とその価値の解明、¹⁴⁾ チベット本『金剛三昧経』に対する概説、¹⁵⁾ 韓国の寺院に残存する『真言集』に関する概論を発表した。¹⁶⁾ 彼はまたチベット訳『修習次第』の訳注研究も公表した。¹⁷⁾ 特に『修習次第』に対する彼の訳注作業は、梵本とともに北京版やデルゲ版など、チベット大蔵経の各種版本をも校勘に用いながら、翻訳を進めたものである。許 一範の後、中庵（チュンアム）が『修習次第』の完訳を刊行した。¹⁸⁾

ダラムサラ（Dharamsala）に留学した経験をもとに、朱 敏晃（ジュ・ミンホァン）が、1998年、「ツォンカパ（Tsong kha pa, 1357-1419）の中観と密教思想」を主題とする論文によってデリー大学から博士号を授与された。¹⁹⁾ 海外に於けることではあるが、彼女は韓国人として初めてチベット仏教の研究によって博士号を取得した人物である。帰国後、彼女はチベット仏教、あるいはチベット密教に対する韓国国内の誤った理解を正すため、菩提心と道次第（*Lam rim*）の体系を強調するチベット仏教関連の論文²⁰⁾を発表した。²¹⁾

梁 承奎（ヤン・スングュ）は、「ゲルツァプ・ダルマリンチェン（rGyal tshab Dharma rin chen, 1364-1432）らが著した『現観莊嚴論』のチベット

注釈書にみえる三種智²²⁾」を主題とする研究によって、2000年に東国大学校から博士号を授与された。韓国の大学において、チベット仏教をテーマとして博士号を取得した最初の人物である。彼はチベット文献に基づいて、ダルマリンチェンの『現観莊嚴論』注釈書²³⁾や、カマラシーラ（ca. 740-795）が著した『金剛經』の注釈書である『聖般若波羅蜜能斷金剛広釈（'Phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa rdo rje gcod pa'i rgya cher 'grel pa）²⁴⁾』、ツォンカパの『菩提道次第略論（sKyes bu gsum gyi nyams su blang ba'i rim pa thams cad tshang bar ston pa'i byang chub lam gyi rim pa）²⁵⁾』、さらにツォンカパの『道の三つの核心（Lam gtso rnam gsum）』に対するダライラマ5世の注釈、パボンカ（Pha bong kha）リンポチェの注釈、ダライラマ14世の注釈を翻訳し紹介した²⁶⁾。またさらにサキヤ（Sa skya）派の巨匠であるサキヤパンディタ・クングゲンツェン（Sa skya paṇḍita Kun dga' rgyal mtshan, 1182-1251）の『善説宝蔵（Legs par bshad pa rin po che'i gter）²⁷⁾』を翻訳した。彼は最近、仏教医学を確立する試みとして、『四部医典（rGyud bzhi）』を中心とするチベット医学の内容を韓国国内において初めてチベット語原典に立脚して紹介している²⁸⁾。

金星喆（キム・ソンチョル）は、「チベット仏教の修行体系と菩薩道」と題する論文において、西洋の文献学的方法論に対する自省の意味を込めて、ツォンカパの『菩提道次第大論（Lam rim chen mo）』に依拠した信仰としての仏教学、すなわち「体系仏学（Systematic Buddhology）」の可能性を提案した²⁹⁾。彼は西洋的な文献学から始まる「人文学的仏教学」と、東アジア仏教の伝統や文化のなかに位置する信仰としての「仏学」とを切り離さなければならない、という点を力説している。彼の批判は、近代的な仏教学が出現した背景とその土台、そして近代仏教学の流入過程において生じた伝統的な仏教信仰との乖離に対する省察から導き出されたものである。

また安 性斗（アン・ソンドゥ）は、如来蔵思想に重点を置くチョナン（Jo nang）学派の他空（gzhan stong）説と、ゲルク（dGe lugs）学派の自空（rang stong）説とを比較する論文を発表した。彼はチョナン学派の他空説が、瑜伽行唯識派の教理、特に『中辺分別論』における三性説の解釈と密接に結び付いていることを指摘している。³⁰⁾

鄭 盛準（チョン・ソンジユン）は、ツォンカパの『秘密道次第大論（sNgag rim chen mo）』のうち、行タントラ（caryātantra）部と瑜伽タントラ（yogatantra）部を翻訳し紹介した。³¹⁾さらにツォンカパが著した『秘密集會成就法安立次第』の注釈に対する研究動向を紹介しながら、韓国におけるチベット密教研究の課題について論じている。³²⁾

安 炳南（アン・ビョンナム）は、アティージャ（Atiśa, ca. 982-1054）の『菩提道灯論』とツォンカパの『菩提道次第大論』、さらにパボンカリンポチェ（Pha bong kha rin po che, 1878-1941）の講演内容をティジャンリンポチェ（Khri byang rin po che, 1901-1981）が編集した『汝の掌中にある解脱道次第論（Lam rim rnam grol lag bcangs）』という三つの論書にみられる道次第の内容を比較した上で、現在ゲルク（dGe lugs）派の寺院において行われている道次第の教授法に関する口伝の伝統を紹介している。³³⁾

崔 年哲（チェ・ヨン Chol）は、チベット仏教文化における代表的な儀礼祭である「カーラチャクラ（kālacakra）タントラ」の入門儀礼儀式と、このタントラの伝承寺院であるナムギャル（rNam rgyal）僧院における伝承体系について、博物館学（Museology）という方法論に依拠しながら考察している。³⁴⁾彼はさらにカトリックとチベット仏教の間にみられる儀礼の類似性と相違点について考察する論文を発表した。³⁵⁾

1988年から現在に至るまでダラムサラにおいて修学を続けている清典（チョンジョン）は、『菩提道次第大論（Lam rim chen mo）』のハングルによる完訳を出版した。³⁶⁾この翻訳は、中国の法尊による『菩提道次第大論』

中国語訳と、菩提道次第大論訳経委員会（Lamrim Chenmo translation committee）による『菩提道次第大論』英訳に次ぐ、三番目の完訳である。

車 相燁（チャ・サンヨブ）は、『菩提道次第大論』シャマタ（śamatha）章の全体的枠組みが、『声聞地』第四瑜伽処の構造と緊密に結び付いていることを明らかにした。³⁷⁾その上で、博士論文においては、ツォンカパが『菩提道次第大論』シャマタ（śamatha）章において引用した唯識文献の内容を中心に、瑜伽行の修行体系が中觀の下位体系にどのように組み込まれているのかを考察した。さらに、心一境性と身心の輕安（*shin sbyangs*）を獲得した状態こそが正しい「止」の状態であり、これがまさに初靜慮の近分定（*bsam gtan dang po'i nyer bsdogs*）と結び付く状態であることを明らかにした。³⁸⁾そして『菩提道次第大論』および初期唯識文献にみえる九種心住（*sems gnas dgu*）と捨（*btang snyoms*）の内容を、原典に基づいて彼此対照した上で批判的に検討した。³⁹⁾さらに彼は、ツォンカパの九識説批判とともに、チベット文献に現れる九識説に関する内容を紹介している。またサキャ（Sa skya）派の代表的な学僧であるサキャパンディタ（Sa skya paṇḍita, 1182-1251）が『彰密意論（*Thub pa'i dgongs pa rab tu gsal ba*）』において、サムイエー（bSam yas）の論争における争点の一つであった、インド仏教の漸悟論と対比される中国仏教の頓悟論と結び付けてカギユ学派の大印（*māhamudrā*）を批判した内容を紹介し、大印批判と関連するサキャパンディタの哲学的立場を分析した。⁴¹⁾さらに新羅出身の淨衆無相（680-756 / 684-762?）の教えを、ポール・ペリオ（Paul Pelliot）が敦煌で発見したチベット語写本、Pt. 116, II.174.2-175.1と同 II.177.3-178.2、さらにチベットの歴史書である『バセー（*sBa bzhed*）』等の内容を通して紹介した。⁴²⁾またさらに昨年刊行した『ゴク・ロデンシェーラブ『宝性論了義』如来蔵品』は、韓国国内においては未だ紹介されていなかったサンブ（gSang phu）派の泰斗、ゴク・翻訳官・ロデンシェーラブ（rNgog Lo tsā ba Blo ldan

Shes rab, 1059-1109) が著した『宝性論』に対するチベット最初の注釈書、『宝性論了義』第一章を校勘・注釈したものである。この訳注書においては、『カダム全書』に収録されている、ウメー (*dbu med*) で書かれたチベット写本を基本として批判校訂本を作成するとともに、訳注作業を行っている。⁴³⁾

ヤン・ジョンヨン (Yang, Jeong-yeon) は、『ツォンカパにおける大乘菩薩戒思想の研究』と題する博士論文において、ツォンカパの大乘菩薩戒思想の特徴について考察している。この論文によれば、ツォンカパが小乗の別解脱律儀戒を大乘菩薩戒の根幹とみなすのは願菩提心を通じて大乘精神を発揚するためであり、それと異なる見解がツォンカパによって論破されているのである。⁴⁴⁾

沈 赫周 (シム・ヒョクジュ) は、『チベットの天葬、天に向かう道』⁴⁵⁾と『チベットの活仏制度：神を作る人々』⁴⁶⁾という著書を通じて、チベット独特の鳥葬文化と転生活仏制度を論じている。彼は研究方法として、フィールドワークを重視する人類学的方法論を採用しているが、これは従来、韓国の学界において等閑視されてきたものである。

グライラマ14世から支援金を受けたことを契機として、2009年、東国大学の慶州 (キョンジュ) キャンパスにチベット蔵経研究所 (The Research Center for Tibetan Buddhist Canon) が設立された。韓国国内に、遂にチベット仏教に関する専門の研究所が開設されたのである。その後、チベット蔵経研究所はチベット語のハングル表記案を公表し、⁴⁷⁾またハラムパゲシェ (*Lha rams pa dGe bshes*) であるテンジンナンカ (*bsTan 'dzin nam mkha'*) は『ヨンジンデュラ (*Yongs 'dzin bsdus grwa*)』⁴⁸⁾の初級部分を翻訳した。完訳ではないが、チベット論理学関係の初めてのハングル翻訳であるという点で少なからぬ意義を有するといえる。

ドイツのボン (Bonn) 大学に留学した全 在星 (チョン・ジェソン)

は、2010年に韓国初のチベット－ハングル辞典を出版した。⁴⁹⁾ 語彙数や用例についてはまだ不足している部分もあるが、ハングルで書かれた初のチベット語辞典であるという点において、少なからぬ意味を有すると考えられる。

梁 午泳（ヤン・オヨン）は、彼の博士学位論文において、『秘密道次第大論（*sNgags rim chen mo*）』に現れるスートラ（*sūtra*）とタントラ（*tantra*）修行それぞれの内容の差異を比較し検討した。⁵⁰⁾ その後、彼は『秘密道次第大論』に現れる成仏の概念に対する理解と仏果を得る方法とについて考察し、チベット仏教において悟りを成就するということは、慈悲心を通じて仏陀の肉体的側面すなわち色身を成就し、智慧を通じて仏陀の精神的側面すなわち法身を具現するという意味であることを明らかにしている。⁵¹⁾

バージニア（Virginia）大学のチベット仏教の巨匠である Jeffrey Hopkins 名誉教授門下において就学したイ・ジョンボク（Yi, Jong-bok）は、ツォンカパの著書である『入中論善顕密意疏（*dBu ma dgongs pa rab gsal*）』において修行者が瞑想をする時、否定対象（*dgag bya*）を正しく定義しなければ真如を満足に観察することはできないのであり、ツォンカパはその否定対象の差異によって自立論証派と帰謬論証派とに区分しているということを明らかにするとともに、ツォンカパが説明する自立論証派の二つの否定対象の違いを明らかにした上で、これに対する異見を提起したジェチュン・チェキゲルチュン（*rJe btsun Chos kyi rgyal mtshan*, 1469?-1544 / 46）、クンル・チェキジュンネ（*Gung ru Chos kyi byung gnas*, 16世紀）に対するジャムヤンシェパ（*Jam dbyangs bzhad pa*, 1648-1721 / 22）の批判を通して、ゲルク派の寺院教材に伝存する多様な教義の逆動性を明らかにした。⁵²⁾ さらに彼はチベットの主要宗派の歴史的形成過程と関係する諸事件を紹介した。⁵³⁾ チベット学と関連する彼の学問的成果には、今後、国際チベット学会（IATS）と国際仏教学会（IABS）とを通じて接することができるであろう。

仏教論理学研究所（Institute of Buddhist Dialects）の分校であり高等チベット学大学（College for Higher Tibetan Studies）であるサラ（Sarah）学校において就学した、ダライラマ14世の韓国通訳士、朴 滙涎（パク・ウンジョン）⁵⁴⁾は、やさしく学ぶ現代チベット語入門を出版した。この本は口語と文語の基礎文法を取り扱っているが、口語により多くの比重を置いている。韓国国内における最初の口語文法書であるという点でその意義は大きいと言うことができる。

4 おわりに

韓国では1990年代からチベット仏教に関する学問的研究が始められたが、これは仏日出版社や精神世界社といった国内の出版社が、1980年頃から大衆向けのチベット仏教関係の書物の翻訳・出版を開始したことと深い関係がある。それらの書物によって、禪仏教に代表される韓国仏教とは対照的な、チベット仏教の教理体系や修行に対する関心が高まっていったのである。

本論において辿ってきた韓国におけるチベット仏教研究の歴史を踏まえて、いくつかの結論を提出することによって本稿を締めくくることとした。

第一に、韓国におけるチベット仏教関係の研究分野は、いまだ多様ではない。チベット仏教の主流と言うべきゲルク派の道次第（*Lam rim*）の修行伝統や、ツォンカパ（*Tsong kha pa*）の『菩提道次第大論』等、幾つかの文献のみに限定された研究が進められているのである。学派という観点からみると、サキヤ（*Sa skya*）派・ニンマ（*rNying ma*）派・カギユ（*bKa' brgyud*）派・チョナン（*Jo nang*）派等に対する研究成果がほとんど存在しないということが、これまでの研究成果の限界を指し示していると言いうことができる。

第二に、チベット仏教研究の方法論という観点からみると、原典および原語に基づく文献学的な研究方法がいまだに根を下ろしていない。多様な形態のチベット語の諸写本を比較し、それに基づいて校勘本を作成しながら訳注を進めるという作業が、いまだ十分には行われていないのである。

韓国は、まだチベット学に関わる研究者の層が厚くなく、チベット文献に関する物的な環境も十分に整ってはいない。韓国におけるチベット仏教学は、今が出发点なのである。近い将来のうちに、チベット仏教に対する韓国人の大衆的な関心が、本格的なチベット学へと引き継がれていくことを願ってやまない。

参考文献

安 性斗（アン・ソンドウ、Ahn, Sung-doo）

2005 「チベット仏教における如来蔵解釈——自空説と他空説の差異を中心として——」、『印度哲学』、Vol. 18、ソウル：印度哲学会、pp. 103-130.

安 炳南（アン・ビョンナム、An, Byung-nam）

2003 “A Study on the Lam rim Tradition in Tibetan Buddhism”, Ph. D. thesis, University of Delhi.

이 종복（イ・ジョンボク、Yi, Jong-bok）

2013 “Monastic Pedagogy on Emptiness in the Geluk Sect of Tibetan Buddhism: Intellectual History and Analysis of Topics Concerning Ignorance According to Svātantrika-Mādhyamika in Monastic Textbooks by Jamyang Shaypa”, Ph. D. thesis, University of Virginia.

2014 「宗派から見るチベット仏教」、『仏教評論』、第16巻第3号、ソウル：万海思想実践宣揚会、pp. 207-225.

李 能和（イ・ヌンホァ、Lee, Neung-hwa）

1918a 『朝鮮仏教通史』、上・中編、京城：新文館。

1918b 『蒙古喇嘛僧と宗派の来歴』、『朝鮮仏教総報』、第9号、京城：新文館、1918年5月、pp. 3-5.

金 星喆（キム・ソンチョル、Kim, Sung-chul）

2002 「チベット仏教の修行体系と菩薩道」、『伽山学报』、Vol. 9、ソウル：伽山仏教文化振興院、pp. 101-123.

沈 赫周（シム・ヒョクジュ、Sim, Hyuk-joo）

韓国におけるチベット仏教研究史（車）

- 2008 『チベットの天葬、天に向かう道』、ソウル：책세상.
- 2010 『チベットの活仏制度：神を作る人々』、ソウル：西江大学校出版部.
- 朱 敏晃（ジュ・ミンホァン、Joo, Min-hwang）
- 1998 “The Madhyamika and Tantric Influence on the Works of Tsong-kha-pa”, Ph. D. thesis, University of Delhi.
- 2000a 「知慧と慈悲の二重奏としてのチベット仏教——チベット仏教、その誤解と神秘を超えて」、『仏教評論』、Vol. 2 No. 4、ソウル：仏教評論社、pp. 16-36.
- 2000b 「何のための「修行」なのか：チベット仏教との比較の観点から——韓国仏教の伝統に対する批判的検討」、『仏教評論』、Vol. 2 No. 2（通巻3）、ソウル：仏教評論社、pp. 233-251.
- 崔 年哲（チェ・ヨンチョル、Choi, Youn-chul）
- 2002 「カトリックとチベット仏教における儀礼の比較」、『仏教評論』、Vol. 4 No. 4（通巻13）、ソウル：仏教評論社、pp. 157-182.
- 2004 “A Museological Study to a Cultural Transmission Model - With a Special Reference to Namgyal Monastery and Kalacakra Initiation Ritual in Tibetan Buddhist Tradition”, Ph. D. thesis, National Museum Institute.
- チベット蔵経研究所
- 2010 『チベット語のハングル表記案』、慶州：チベット蔵経研究所.
- 車 相燁（チャ・サンヨブ、Cha, Sang-yeob）
- 2004 「菩提道次第大論」における瑜伽行の研究」、『普照思想』、Vol. 21、ソウル：普照思想研究院、pp. 99-134.
- 2005 「シャマタ修行としての九種心住に対する理解」、『悔堂学報』、Vol. 10、ソウル：悔堂学会、pp. 215-238.
- 2008 『ツォンカパ（Tsong kha pa）における瑜伽行修行体系の研究』、ソウル：東国大学校、博士学位請求論文.
- 2010a 「イダンクンシカンテル（*Yid dang kun gzhi'i dka' 'grel*）の心識説にみられる円測の影響」、『韓国仏教学』、Vol. 56、ソウル：韓国仏教学会、pp. 301-332.
- 2010b 「ツォンカパのアーラヤ識理解と円測」、『仏教学研究』、Vol. 26、ソウル：仏教学研究会、pp. 209-243.
- 2012a 「サキヤパンディタ（Sa skya paṇḍita）のマハムドゥラー（Māhamudrā）批判」、『普照思想』、Vol. 37、ソウル：普照思想研究院、pp. 395-429.
- 2012b 「チベット文献にみえる浄衆無相に関する研究——バシエ（*sBa bzhed*）ほかのチベット史料と敦煌写本（Pelliot No. 116）を中心として」、『韓国仏教学』、Vol. 64、ソウル：韓国仏教学会、pp. 7-32.
- 2013 『ゴク・ロデンシェーラプ『宝性論要義』如来蔵品』、ソウル：CIR.
- 2014 「縁起と空性、如来蔵に対するチベット思想家達の理解」、『仏教学研究』、Vol. 38、ソウル：仏教学研究会、pp. 185-221.

中庵（チュンアム、Chung-ahm）

2006 『カマラシーラ『修習次第』の研究——サムイエー（bSam yas）の論争の研究』、ソウル：仏教時代社。

全 在星（チョン・ジェソン、Cheon, Jae-seong）

2010 『チベット—ハングル辞典』、ソウル：韓国パリー聖典協会。

清典（チョンジョン、Cheong-jeon）

2005 『悟りに至る道』、ソウル：지영사。

鄭 盛準（チョン・ソンジュン、Cheong, Seong-joon）

2001 『『秘密道次第論』行タントラ部』、『仏教原典研究』、Vol. 2、ソウル：東国大学校仏教文化研究院、pp. 69-90。

2002a 『『秘密道次第論』瑜伽タントラ（Yoga-tantra）部』、『仏教原典研究』、Vol. 3、ソウル：東国大学校仏教文化研究院、pp. 81-100。

2002b 『『秘密道次第論』瑜伽タントラ（Yoga-tantra）部 II』、『仏教原典研究』、Vol. 44、ソウル：東国大学校仏教文化研究院、pp. 277-310。

2003 『『秘密道次第論』瑜伽タントラ（Yoga-tantra）部 III』、『仏教原典研究』、Vol. 55、ソウル：東国大学校仏教文化研究院、pp. 219-242。

2004 『『秘密道次第論』瑜伽タントラ（Yoga-tantra）部 IV』、『仏教原典研究』、Vol. 6、ソウル：東国大学校仏教文化研究院、pp. 207-230。

2009 『ツォンカパ『秘密集会安立次第論注釈』にみえるチベット密教の課題』、『仏教学研究』、Vol. 24、ソウル：仏教学研究会、pp. 287-318。

鄭 泰燦（チョン・テヒョク、Jung, Tae-hyuk）

1968 『（標準）梵語学』、ソウル：仏書普及社。

1972 『月称造・梵文『中論釈』観聖諦品訳注』、『仏教学報』、9輯、ソウル：東国大学校仏教文化研究院、pp. 203-264。

1979 『無上瑜伽密教護摩儀軌の構造と意味』、『仏教学報』、16輯、ソウル：東国大学校仏教文化研究院、pp. 205-220。

1980 『西藏仏教と歓喜仏』、『釈林』、14、ソウル：東国大学校釈林会、pp. 29-35。

1981 『現代仏教新書 密教』、ソウル：東国大学校附設経院。

1982a 『（基礎）西藏語』、ソウル：宝蓮閣。

1982b 『密教の実践哲学とヨガ修法の成就』、『仏教学報』、19輯、ソウル：東国大学校仏教文化研究院、pp. 67-86。

1984 『正統密教』、ソウル：経書院。

1996 『密教の世界』、ソウル：高麗院。

テンジンナンカ（bsTan 'dzin nam mkha'）

2012 『論理に至る神秘の鍵』、慶州：チベット蔵経研究所。

朴 滙澁（パク・ウンジョン、Park, Eun-jeong）

2014 『やさしく学ぶ現代チベット語』、ソウル：ウンジュ社。

韓国におけるチベット仏教研究史（車）

許 一範（ホ・イルボム、Heo, Il-beom）

- 1990a 『チベット語の基礎と実践』、ソウル：民族社。
 1990b 「東国大学校所蔵ラサ版チベット大蔵經の由来と内容」、『韓国仏教学』、第15輯、ソウル：韓国仏教学会、pp. 351-370。
 1991 「チベット訳・円測『解深密經疏』に関する基礎研究」、『東国思想』、Vol. 24、ソウル：東国大学校仏教学部学生会、pp. 21-28。
 1992 「チベット本『金剛三昧經』の研究」、『仏教研究』、8輯、ソウル：韓国仏教研究院、pp. 87-114。
 1993 「望月寺本『真言集』の研究」、『伽山学報』、Vol. 2、ソウル：伽山仏教文化振興院、pp. 233-251。
 1995 「慈悲の重要性とその修習：Kamalaśīla『修習次第』訳注」、『伽山学報』、Vol. 4、ソウル：伽山仏教文化振興院、pp. 241-260。
 1996 「菩提心の重要性とその修習：Kamalaśīla『修習次第』訳注（2）」、『伽山学報』、Vol. 5、ソウル：伽山仏教文化振興院、pp. 407-429。
 1997 「行の重要性とその修習——Kamalaśīla『修習次第』訳注（3）」、『伽山学報』、Vol. 6、ソウル：伽山仏教文化振興院、pp. 315-332。
 1998 「奢摩他の成就法：Kamalaśīla『修習次第』訳注（4）」、『伽山学報』、Vol. 7、ソウル：伽山仏教文化振興院、pp. 391-404。
 2000 「知恵と方便の成就道——Kamalaśīla『修習次第』訳注（5）」、『伽山学報』、Vol. 8、ソウル：伽山仏教文化振興院、pp. 239-259。
 2002 「究竟地の体得——Kamalaśīla『修習次第』訳注 VI」、『伽山学報』、Vol. 9、ソウル：伽山仏教文化振興院、pp. 127-144。

梁 午泳（ヤン・オヨン、Yang, Oh-young）

- 2011 “Bridging Sutra and Tantra: A Study of Buddhist System in Tibet”, Ph. D. thesis, University of Delhi.
 2012 「チベット仏教における成仏の意味——後期密教における色身成就の修行を中心として」、『韓国仏教学』、第63輯、ソウル：韓国仏教学会、pp. 265-280。

양 정연（ヤン・ジョンヨン、Yang, Jeong-yeon）

- 2008 『ツォンカパにおける大乘菩薩戒思想の研究』、ソウル：東国大学校、博士学位請求論文。

梁 承奎（ヤン・スングユ、Yang, Sung-kyu）

- 2000a 「『現觀莊嚴論』(Abhisamayālaṃkāra)における三種智の研究：ジェヤブセ(rJes yab sras)の注釈を中心として」、ソウル：東国大学校、博士学位請求論文。
 2000b 「『現觀莊嚴論』(Abhisamayālaṃkāra)における「八事七十義」の研究：ゲルチャブ・ダルマリンチェン(rGyal tshab Dar ma rin chen)の注釈を中心として」、『仏教文化研究』、Vol. 1、慶州：仏教社会文化研究院、pp. 67-97。

韓国におけるチベット仏教研究史（車）

- 2001 「現観莊嚴論の略義である宝環」、『仏教文化研究』、Vol. 2、慶州：仏教社会文化研究院、pp. 91-118.
- 2003 『チベットの金剛經：カマラシーラ『金剛經広釈』、安城：度彼岸社.
- 2006 『菩提道次第略論』、始興：時輪.
- 2009a 『ツォンカパ（Tsong kha pa）の道の三つの核心』、始興：時輪.
- 2009b 『サキヤバンディタの瞑想録』、始興：時輪.
- 2012 「仏教医学確立のための試み——『四部医典』を中心として」、『仏教学研究』、第31号、ソウル：仏教学研究会、pp. 7-34.
- HS 生（HS Saeng）
- 1910a 「西藏の概観——記者の緒言——」、『大韓興学报』、第10号、東京：大韓興学会、1910年2月、pp. 42-46.
- 1910b 「西藏概観」、『大韓興学报』、第13号、東京：大韓興学会、1910年5月、pp. 34-38.
- Wellby, M. S.
- 1898 *Through Unknown Tibet*, London: T. Fisher Unwin Paternoster Square.

注

- 1) 本稿において紹介する資料は、学術的に価値があると認められる、韓国語で書かれた論文と著訳書とに限定する。ただし例外として、韓国人が海外において取得したチベット仏教関連の博士論文については、これを取り上げることとする。また翻訳書の場合は、チベット語原典から直接翻訳したものだけを紹介することにした。
- 2) HS 生は筆名、あるいはイニシャルであると思われる。彼の生没年や正確な氏名は不明である。
- 3) 1909年3月20日に創刊された『大韓興学报』は、1910年5月20日の第13号をもって廃刊となった。毎月一回の発行を原則としていたが、第5号が7月20日に発行された後、第6号が10月20日に発行されるまで、なぜか三ヶ月の空白期間があった。ただしこの空白期間以外は、毎月一回ずつ定期的に発行された。
- 4) HS 生 [1910a]。HS 生は、Wellby [1898] におけるチベット仏教関連の記述を紹介している。
- 5) HS 生 [1910b]。
- 6) 李能和 [1918a]。
- 7) 李能和 [1918b]。
- 8) 李能和 [1918b: 5]。
- 9) 鄭泰嶺 [1979] [1981] [1982b] [1984] [1996]。
- 10) 鄭泰嶺 [1982a]。同 [1968] は、韓国国内においてハングルで出版された最初の梵

語文法書である。

- 11) 鄭泰嫻 [1972]。
- 12) 鄭泰嫻 [1980]。
- 13) 許一範 [1990a]。
- 14) 許一範 [1990b]。
- 15) 許一範 [1991]。
- 16) 許一範 [1992]。
- 17) 許一範 [1993]。
- 18) 許一範 [1995] [1996] [1997] [1998] [2000] [2002]。
- 19) 中庵 [2006]。
- 20) 朱敏晃 [1998]。
- 21) 朱敏晃 [2000a] [2000b]。
- 22) 梁承奎 [2000a]。
- 23) 梁承奎 [2000b] [2001]。
- 24) 梁承奎 [2003]。
- 25) 梁承奎 [2006]。
- 26) 梁承奎 [2009a]。
- 27) 梁承奎 [2009b]。
- 28) 梁承奎 [2012]。
- 29) 金星喆 [2002]。
- 30) 安性斗 [2005]。
- 31) 鄭盛準 [2001] [2002a] [2002b] [2003] [2004]。
- 32) 鄭盛準 [2009]。
- 33) 安炳南 [2003]。
- 34) 崔年哲 [2004]。
- 35) 崔年哲 [2002]。
- 36) 清典 [2005]。
- 37) 車相燁 [2004]。
- 38) 車相燁 [2008]。
- 39) 車相燁 [2005]。
- 40) 車相燁 [2010a] [2010b]。
- 41) 車相燁 [2012a]。
- 42) 車相燁 [2012b]。
- 43) 車相燁 [2013]。なお同 [2014] は、チベットの思想家達の間に見られる如来蔵に対する相異なる見解を紹介したものである。
- 44) ヤン・ジョンヨン [2008]。
- 45) 沈赫周 [2008]。

韓国におけるチベット仏教研究史（車）

- 46) 沈赫周 [2010]。
- 47) チベット蔵経研究所 [2010]。
- 48) テンジンナンカ [2012]。
- 49) 全在星 [2010]。
- 50) 梁午泳 [2011]。
- 51) 梁午泳 [2012]。
- 52) イ・ジョンボク [2013]。
- 53) イ・ジョンボク [2014]。
- 54) 朴憲涎 [2014]。

日本語訳：河 栄秀（ハ・ヨンス）

監修：池田 将則（いけだ・まさのり）

이 논문은 2007년 한국정부 (교육과학기술부) 의 재원에 의하여 한국연구재단의 지원을 받아서 수행된 연구입니다 . (NRF-2007-361-AM0046)